

国語研の窓 第37号 (2008年10月1日発行)

雑誌名	国語研の窓
巻	37
ページ	1-8
発行年	2008-10-01
URL	http://doi.org/10.15084/00001924

国語研の窓

37号

平成20年10月1日 第37号 発行 独立行政法人国立国語研究所
Independent Administrative Institution: The National Institute for Japanese Language

編集 国立国語研究所管理部総務課
普及広報担当グループ
〒190-8561 東京都立川市緑町10-2
電話 042-540-4300 FAX 042-540-4334
URL <http://www.kokken.go.jp/>



第1回国際シンポジウム（平成6年開催）

もくじ

暮らしに生きることば	1
研究室から：	
『現代日本語書き言葉均衡コーパス』進捗報告（2）	2
『日本のふるさとことば集成』全巻刊行を終えて	3
半世紀に渡ることば遣いの変化に迫る	
— 第三次岡崎調査 —	4
文字さんぽ	5
連携機関訪問報告：国立国語院（韓国）	5
創立60周年に寄せて：	
日本語教育センター発足の頃	6
ことばQ & A	7
表紙のことば	7
お知らせ：「ことば」フォーラム	8
お知らせ：公開研究発表会	8
新刊	8

暮らしに 生きる ことば

「入れ物」と「物入れ」

日常の話しことばを観察すると、「これだけ」を「コンダケ」、「それで」を「ソンデ」、「今のとこ」を「イマノトコ」といったように、「ら」や「の」を「ン」と発音することがあります。同じ現象が「もの（物／者）」にも見られます。

入れ物、店屋物、品物、落とし物、買い物、
浮気者、曲者、働き者、若者、やっかい者

どの例も「イレモン」「テンヤモン」「ウキモン」「クセモン」のように、「モン」と発音することができそうです。しかし次の例はどうでしょうか。

物入れ、物音、物干し、物悲しい、物の怪、
物まね、物陰、物語り、物見遊山、者ども

「モンイレ」「モンオト」「モンホシ」…。あまり「モン」とは言いそうにありません。一体何が違うのでしょうか。例を比べると、「もの」が語の末尾にあ

る時は「モン」とも発音されるのに対し、語の先頭にある時はあまり「モン」とは発音されない、という傾向が見えてきます。次の例はどうでしょう。

- (1) 彼は物をよく壊す。
- (2) 彼は昨日買った物を壊してしまった。

(1)は「物」が単独で用いられていますが、このような場合に「モン」とはあまり言いません。しかし(2)の「昨日買った物」のように「物」の前にそれを説明する要素がある場合には「モン」と言うことができます。「入れ物」や「浮気者」も「物／者」の前にそれを説明する要素があるという意味では同じですね。「モン」という発音の背後にはこのような共通点が見られるわけです。

さて、冒頭に挙げた「これ／それ」も、「コンダケ」「ソンデ」とは言えても、「コンマデ」「ソンガ」とはあまり言いませんね。どのような時に「コン／ソン」と言えるのでしょうか。「もの」と同じように、色々な例を比較しながら考えてみましょう。

（小磯 花絵）

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』進捗報告（2）

形態論情報の付与

言語研究では、例えば小説『明日の記憶』には、どの語がどのくらい使われているのか、「文化」という語は単独で使われることが多いのか、それとも「上方文化」のように他の語と複合して使われることが多いのかなど、“語”に着目した分析を行うことが多くあります。そのため、コーパスを日本語研究に活用できるようにするためには、コーパスに収録した文章を語に区切り、品詞などの情報を付けることが必要です。テキストに付与した単語や品詞などの情報を「形態論情報」と呼びます。

〈語の区切り方〉

日本語は英語と異なり、分かち書きをしない言語であるため、語に区切るといっても色々な区切り方が考えられます。

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』では、2種類の区切り方で文章を語に区切ることになりました。一つは「国立国語研究所」を「／国立／国語／研究／所／」の4語とする区切り方で「短単位」と呼んでいます。もう一つは「国立国語研究所」を1語とする区切り方で「長単位」と呼んでいます。短単位・長単位それぞれに品詞などの情報を付けます。

〈自動形態素解析〉

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』は1億語という大規模なコーパスであるため、手作業で形態論情報を付けることは不可能です。そこで『現代日本語書き言葉均衡コーパス』では、コンピューターを使って、形態論情報を自動付与します。これは自然言語処理の分野で開発された技術で、形態素解析と呼びます。

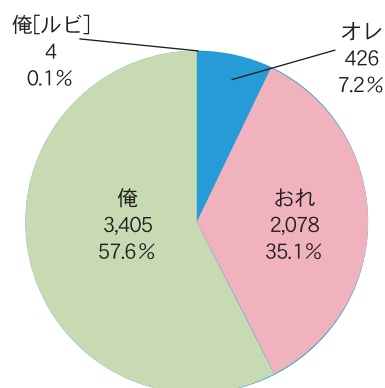
短単位への解析は、形態素解析ソフトウェア「茶筌」や「^めMeCab^{かぶ}」と、国立国語研究所で開発を進めている形態素解析用電子化辞書 UniDic とを組み合わせで行います。この自動解析の精度は現時点で98%以上です。今後も引き続き電子化辞書への単語登録などを進め、解析精度の向上を目指します。

長単位は、短単位に解析したデータを基にソフトウェアを使って自動構成します。現在、解析精度向上に必要なデータの整備等を行っています。

〈形態論情報から分かること ―「オレ」の表記―〉

形態論情報を使った日本語の実態調査の例として、代名詞「オレ」がどのような表記で用いられているかを見ていきます。

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の生産実態サブコーパスの書籍データ(約1,500万語)を使って、代名詞「オレ」がどのような表記で、どのくらい用いられているか調査しました。結果は下図のとおりです。



「俺」は常用漢字表に掲げられていない漢字（表外漢字）ですから、常用漢字表に従えば、代名詞「オレ」は漢字を使わずに仮名書きすることになります。しかし実際には、平仮名表記は3割台で、表外漢字「俺」を使った表記が半数以上を占めます。代名詞「オレ」は、表外漢字「俺」で表記することが一般的になってきていると考えられます。

現在、文化審議会国語分科会では、常用漢字表の見直しに関する審議が行われています。平成20年7月31日の文化審議会国語分科会総会では、現行の常用漢字表に追加する漢字の候補188字が了承されましたが、この中に「俺」も入っています。「俺」を追加候補とするに際しては、上に示した代名詞「オレ」の表記調査のデータが参考にされました。このことから、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』は学術研究だけでなく、国語施策といった実面的な面にも貢献し得る極めて有用なコーパスと言えます。

国立国語研究所が開発を進めている形態素解析用電子化辞書 UniDic は、<http://download.unidic.org/>で公開しています。利用者登録をすれば、無料でダウンロードして利用できます。UniDicの利用登録者数は1,000名を超え、人文系から工学系まで幅広く利用されています。なお、このサイトでは、初心者でも簡単に UniDic を使った形態素解析ができるツール「茶まめ」(Windows版のみ)も公開しています。

(小椋 秀樹)

『日本のふるさとことば集成』全巻刊行を終えて

国立国語研究所編『国立国語研究所資料集 13 全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成』全20巻〔各巻：冊子(A5判約270ページ)1冊+CD-ROM(Windows・Macintosh版)1枚+CD1枚 7,140円(税込)〕国書刊行会

平成13(2001)年11月から刊行を開始した『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成』は、平成20(2008)年7月に全20巻が完結しました。

このシリーズには、文化庁が実施した全国規模の方言談話の収録事業「各地方言収集緊急調査」の報告をもとに、北海道から沖縄まで47都道府県の48地点について、約23時間(各巻平均約70分)の方言会話を収録しています。おもに明治生まれの人たちの生き生きとした会話からは、各地の方言を知ることができるばかりではなく、その背景にある生活・文化・歴史なども垣間見ることができます。

これらの資料は、急速に失われつつある伝統的な方言の文化財としての記録であるとともに、各地の方言のしくみや方言独自の表現の使われ方を明らかにするための貴重な研究データとしても意義のあるものです。

日本語の基礎的な研究資料を劣化させたり散逸させたりすることなく、共通の知的財産・資源として将来へ継承しながら活用していくためには、継続的で組織的な取り組みが必要です。そのための対策のひとつとして、電子化があります。電子化を行うことによって、原資料はもとの状態に近い形で保管・保存することができます。また、電子化された資料は利用が容易になり、過去の研究の検証や、新たな研究への展開につなげることができます。

CD・CD-ROMには方言の会話の音声进行録し、冊子・CD-ROMには、音声の文字化、共通語訳、収録地点と方言の解説、などを収めました。なお、方言音声のサンプルは、国語研究所ホームページから試聴できます。

http://www.kokken.go.jp/siryokan_data/hogendanwa_db/

従来にはあまりなかった、音声と文字化の電子化データを備えていますので、検索や加工が簡単に行き、教育や研究にご活用いただけることと思います。

『全国方言談話データベース』刊行にご協力くださった方々、「各地方言緊急調査」の話者・収録者・関係者のみなさまに深くお礼申しあげます。

(井上 文子)

巻	収録地点	収録年	話 題
第1巻	北海道中川郡豊頃町	1978年	年中行事、昔の生活の様子
	青森県弘前市	1979年	弘前の昔の風物詩
第2巻	岩手県遠野市	1980年	ご祝儀のこと
	秋田県湯沢市	1977年	水害、ツツガムシ、ほか
第3巻	宮城県仙台市	1977年	仙台の昔の様子、ほか
	山形県東田川郡櫛引町	1980年	お盆、眠り流しと茄子焼き
	福島県大沼郡昭和村	1982年	農作業と食生活
第4巻	茨城県水戸市	1982年	薬草と病気
	栃木県日光市	1979年	狐のいたずら、昔の祝儀、ほか
第5巻	埼玉県児玉郡上里町	1981年	地震、雷、ほか
	千葉県長生郡長生村	1977年	地曳網漁、あぐり網漁、ほか
第6巻	東京都台東区	1980年	年末年始、初午、ほおずき市
	神奈川県小田原市	1983年	年中行事
第7巻	群馬県前橋市	1983年	養蚕のこと
	新潟県糸魚川市	1980年	石運び、嫁入りの頃、ほか
第8巻	長野県木曽郡開田村	1978年	小学校に通った頃、ほか
	山梨県塩山市	1978年	ほうとう、食べ物
	静岡県静岡市	1979年	お茶の話
第9巻	岐阜県中津川市	1979年	医者、病気について、ほか
	愛知県常滑市	1981年	日照り、食べ物、伊勢参り
	三重県志摩郡阿児町	1981年	小学校の頃の思い出
第10巻	富山県砺波市	1981年	昔の食べ物、労働の移り変わり
	石川県羽咋郡押水町	1977年	冬の藁仕事、元服
	福井県勝山市	1982年	土地の食べ物の話
第11巻	京都府京都市	1983年	年末年始の行事
	滋賀県甲賀郡甲賀町	1981年	昔の食生活
第12巻	奈良県五條市	1981年	趣味と病気、ほか
	和歌山県田辺市	1981年	子供の遊び、ほか
第13巻	大阪府大阪市	1977年	大阪弁、船場ことば、ほか
	兵庫県相生市	1985年	子供の頃の遊び、ほか
第14巻	鳥取県米子市	1984年	骨董品の話
	島根県仁多郡仁多町	1980年	農作業、子どもの頃、夏祭り
	岡山県小田郡矢掛町	1979年	農業と天候
第15巻	広島県広島市	1977年	神楽
	山口県豊浦郡豊北町	1978年	井戸掘り、箱苗、ほか
第16巻	香川県観音寺市	1978年	池普請と水引き
	徳島県阿南市	1981年	虫とり、台風と大水
第17巻	愛媛県松山市	1981年	狸、内職、風鎮祭
	高知県高知市	1977年	昔の仕事
第18巻	福岡県北九州市	1980年	調査地の現況と変遷
	大分県大分郡挾間町	1978年	昔の結婚式、ほか
	宮崎県宮崎市	1981年	船乗りの時の話、ほか
第19巻	佐賀県佐賀市	1978年	昔と今
	長崎県平戸市	1983年	商いの話、御潮斎、ほか
	熊本県球磨郡錦町	1980年	湯前線開通当時の思い出、ほか
第20巻	鹿児島県揖宿郡穎娃町	1977年	戦時中回顧談、青年団の活動
	沖縄県国頭郡今帰仁村	1978年	年中行事
	沖縄県平良市	1978年	お正月の話

半世紀に渡ることば遣いの変化に迫る

—第三次岡崎調査—

〈3回目の岡崎調査〉

国立国語研究所は、創立の翌年にあたる昭和24年から、全国各地でことば遣いの実態を明らかにする調査を企画・実施してきました。地域社会やそこに住む人がどのようなことば遣いで生活を営んでいるのか、また、社会環境や性別・年齢といった属性の違いがそのことば遣いにどのように影響しているのかを調べるための調査です。

その調査の一つに、愛知県岡崎市での敬語と敬語意識を調べる調査があります。岡崎調査は、昭和28年（1953年）に1回目、昭和47年（1972年）に2回目の調査を実施しています。

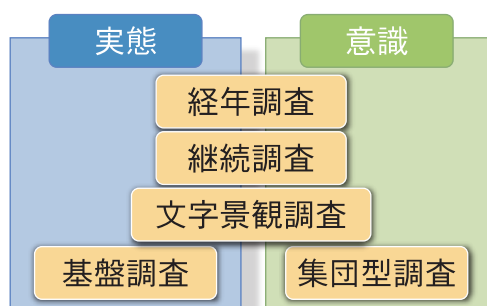
敬語を含めたことばの使用には社会的条件が関係しています。社会条件の複雑すぎる大都市でもなく、また農村のような比較的単純で、特殊な条件を持っている可能性のある地域社会でもない中小都市として、岡崎市が選ばれました。

1回目から55年が経った今年、半世紀に渡ることば遣いの変化に迫るべく、3回目の調査を計画しています。

〈ことばの使い分けの実態と意識に迫ります〉

人はことばを使い分けて生活を営んでいます。相手との関係（年齢、性別、役職など）や、どんな内容の話をするのか、どんな場所・状況で話をするのかといった条件が複雑に絡み合って、ことばを使い分けているのです。では、人はなぜことばを使い分けようとするのでしょうか。それは、「この人に対しては、こんなことば遣いをするべきだ」という信念や、「相手には、こういうことば遣いをしてほしい」などの願望といった意識があるからです。

このことばの使い分けの実態と意識に迫るために、岡崎調査では、以下に挙げる五つの調査を計画しています。



経年調査と継続調査は、場面によることばの使い分けを中心とした同じ内容の調査です。

経年調査は、昭和28年の1回目、昭和47年の2回目の調査に協力していただいた方に再度お願いす

る調査です。継続調査は、今回新たに選んだ方をお願いする調査です。調査地域に居住する15歳～79歳の岡崎市民800名を、無作為抽出というくじ引きのような統計学的手法で選びます。どちらの調査も、記入式のアンケート調査と、ご協力いただく方と調査員が対面式で行う面接調査の二つで構成されています。

ことばを使い分けるという行為は、話しことばに限ったものではありません。文字の選択もまた、ことばを使い分けることになります。岡崎市の幹線道路や商店街の看板・掲示物などで使い分けられる文字を調査するのが**文字景観調査**です。また、**基盤調査**とは、岡崎市生え抜きの年配の方に、昔ながらの岡崎のことばについて聞き書きする調査で、ことばの使い分けの実態をより詳細に描き出すことを目指しています。**集団型調査**とは、経年調査・継続調査にご協力いただいた方や中学生・高校生に、特定の場所に集まっていたいただき、ことばの使い分けに対する意識を尋ねる調査です。

この5つの調査研究を複合させ、複雑なことばの使い分けの仕組みを解明することが研究目的です。

〈今年度は経年調査と継続調査を実施します〉

基盤調査と文字景観調査は既に昨年度から調査を開始しています。今年度は、11月に経年調査と継続調査を実施します。調査にご協力いただく方には、事前に調査協力のお願いと記入式の調査票を郵送します。その調査票を、国立国語研究所の研究員のほか、国内の大学教員、大学院生が調査員となって受け取りにまいります。その際、調査員との面接調査にもご協力いただくことになります。半世紀に渡ることばの変化に迫る、世界でも類を見ない学術的な調査です。なお、集団型調査は来年度、実施予定です。

〈岡崎調査をよりご理解いただくために〉

岡崎調査への理解を深めていただくために、岡崎市の広報紙や各地区の回覧板での連絡、掲示板でのチラシ掲示を計画しています。また、10月には岡崎市にて「ことば」フォーラムを開催する予定です（p.8参照）。

岡崎調査の詳細な活動の情報は、国立国語研究所の岡崎調査ホームページ（<http://www.kokken.go.jp/okazaki/>）に掲載しています。調査の概要や計画、岡崎調査の企画・実施に向けた研究メンバーの情報、学会での研究発表・ワークショップ・学術論文等の研究成果も掲載しています。また、3回目の調査結果についても、準備ができ次第、順次掲載していく予定です。是非ご覧ください。

（朝日 祥之・阿部 貴人）

材

愛知県岡崎市は石工の町としても知られています。周辺で採れる質のよい花崗岩を使い、古くから石工品を産出しています。

市街地の花崗（みかげ）町には、十数軒の石材店が軒を並べています。「材」の字に注目しながら石材店の看板を見ていくと、3種類の「材」があることに気がつきます。



(1) は、国語の時間に教わる普通の「材」です。(2) は、^{つくり}旁が「戈」になっている「材」です。(3) は、(2) の字体に点が一つ増えて、「戈」になっている「材」です。

(2) の字体は、鎌倉時代の観智院本『類聚名義抄』^{かん ち いん ぼん るいじゆみようぎしやう}などの古辞書にも使われています。筆写字体として古くから使われてきたものです。「才」を「戈」と書く事例があることを参考にすると、(1) の字体か

ら (2) の字体が派生したのではないかと推測されます。

また、(3) の字体は、「丈」に対して「丈」，「土」に対して「土」のように、書法上の安定性を持たせるための点が付加されたものか、あるいは、「戈」や「伐」からの類推によって発生した字体と考えられます。(1) の字体から直接 (3) の字体が派生したのではなく、(2) の字体から (3) の字体が派生したと考えるのが妥当でしょう。

石材店に使われる「材」の異体字の派生関係をまとめると、字体 (1)「材」→字体 (2)「材」→字体 (3)「材」の順に変化していったと推測されます。

さて、「材」や「材」は、岡崎市の石材店だけではなく、全国の石材店で見るができます。また、石材店だけでなく木材店の看板でも、これらの字体が使われています（写真1・写真2参照）。現在では、「材」や「材」は、建築・加工のための資材を扱う業種において特有の文字になりつつある可能性があります。



写真1



写真2

（高田 智和）

連携機関訪問報告：国立国語院（韓国）

国立国語研究所は、韓国のソウル市にある国立国語院と学術交流協定を結んでいます。学術交流の一環として、7月22日（火）、横山詔一、丸山岳彦、朝日祥之の3名が、国立国語院を訪問しました。

午前中は、国立国語院の李相揆（Lee Sang Gyu）院長と懇談しました。言語調査の成果を政策へ結びつけることの大切さや、日本・韓国・中国を始めとしたアジア圏の中で言語資源を整備していくことの重要性などについて話し合いました。

午後には、国語研究所の3名が、「言語変化のS字カーブによる鶴岡市の共通語化予測」（横山）、「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の設計と構築」（丸山）、「言語生活の現在」（朝日）と題した講演を、1時間半ずつ行いました。

各発表の後には、国立国語院の研究者から多くの

質問が寄せられました。特に、国民がどのように言葉を使っているか、どのように言葉を意識しているか、といった言語生活に関する話題への関心が高く、熱心な議論が繰り広げられました。

（丸山 岳彦）





創立60周年に寄せて

国立国語研究所は今年12月20日、創立60周年を迎えます。前号に続き、元所員の方に、在職当時の調査研究事業の様子や思い出を紹介していただきます。

日本語教育センター発足の頃

上野 田鶴子（放送大学客員教授・
特定非営利活動法人日本語教育研究所理事長）

日本語教育センター（以後、センター）は1977年4月に発足し、私は第二研究室長として10月に着任しました。センターには対照研究のための4研究室に加え教材開発室と研修室がありました。第一研究室は基礎研究、第二研究室は欧米語、第三研究室は東南アジア語、第四研究室は東アジア語との対照研究を担当し、教材開発室は映像教材作成、研修室は教員養成のための長期研修と短期研修を担当していました。初年度は第一研究室、第二研究室、教材開発室と研修室の4室で、その後、第三研究室、第四研究室と1年1研究室の人事でセンターが出来上がっていきました。既に人員削減が始まっていて、発足当初の構想に反し、室長のみ研究室もあり、センター構成メンバーは14、5名を超えることはなかったように思います。

国立国語研究所（以後、研究所）では研究員全員の研究部会議が週一回開催され、センターはこれに加えセンター会議を毎週開き、各研究室、教材開発室、研修室の所属を越え、相互協力体制で当初の職務遂行に努めました。林大所長、野元菊雄センター長の時代です。教材開発室は所外の委員を多勢含む委員会で問題を議し、研修室は一年を期間とする長期研修と短期研修を運営し、夏季に東京と大阪で開催された短期研修には全国から受講生が参加しまし

た。また、国内外の研究者の出入りも多く、常に賑やかなセンターという印象がありました。

1970年代から1980年代にかけては、限られた大学を除けば日本語教育の専門家のいない時代です。受講可能な教員養成講座があちこちにできたのは1980年代後半のことでした。このため、センターの初心者研修にも現職者研修にも津々浦々から受講生が集まりました。21世紀の現在、日本語教育の分野で活躍する人の多くがセンターの研修修了生です。長期及び短期研修の運営には所外の専門家の協力を仰ぎましたが、40名を超える研究所員の専門分野で研修内容の充実が図れたことも幸いなことでした。

センター発足の頃は、インドシナ半島からの難民受け入れが始まり、定住促進のための日本語教育が求められました。また、中国帰国者の定着促進のための日本語教育も必要となり、従来の留学生を中心とする高等教育のための日本語教育とは異なる、生活のための日本語教育の工夫が新たな課題となりました。更に、その後に提唱された留学生10万人構想によって、留学生受け入れのための教員養成が急務となり、公立私立大学に日本語主専攻、日本語教育主専攻の学科が設置されました。日本語教育多様化の時代に向かい、センターが果たした役割の一つには、年少者の日本語教育、大学における日本語教育、教員養成のための日本語教育等々の連絡協議会を順次開催し、関連機関連携のお膳立てをしたことが挙げられます。3年から5年かけると連絡協議会の成果が実り、協議会が自立してその機能を果たすプロセスは興味深いものでした。

当時、研究所ではサークル活動が活発に行われていました。同じ屋根の下にいても所属が異なると話を交わす機会は少ないのですが、サークル活動を通じて問題を共有し、親睦の時をもち、部署を越えた交流ができました。短い昼休みを活用してピンポンに興じる人、コーラスを楽しむ人、いろいろなサークル活動があったことが懐かしく思い出されます。



1977年夏季短期研修（東京・国語研究所）
試験問題に取り組む受講生

ことばQ&A

※このコーナーは、当研究所に寄せられた言葉についての質問をもとに作成しています。



質問 沖縄県に「にんじんのしりしり」という家庭料理があるそうです。「しりしり」とはなんですか。



回答 以前、ある新聞社から同様の質問がありました。インタビューに答えた沖縄出身の女優が「にんじんのしりしり」と呼ぶ卵炒めに入る「しりしり」とは、道具で作る千切りのことだと説明したそうです。ところが、インターネット上では「すりおろしたもの」ばかりではなく、いわゆる「おろしがね（大根おろし）」や「鬼おろし」、ピーラーやスライサーの類も「しりしり」と呼び、さらに「すりおろすこと（動作）」を表わす場合があります。

沖縄方言といえば、国立国語研究所の昭和38年に初版を刊行した『沖縄語辞典』もあります。この索引から、関連する「おろしがね」「大根おろし」の項目が見つかりました。

deekunişiriii® (名) 大根をおろすおろしがね。şegana ともいう。
deekunişiririşiriii® (名) 大根おろし。大根をすりおろしたもの。

これによると、「でえくにしりい」が「大根おろし」すなわち「おろしがね」（道具）のこと、「でえくにしりしりい」が「大根おろし」「大根をすりおろしたもの」であるとあります。後者の「大根おろし」というのが「おろしがね」（道具）をあらわす

のか、それとも「しりしりい」はすりおろした食べ物だけをあらわすのか、厳密にはわかりません。この「しりい」は動作の動詞「する」の連用形転成名詞「すり」のことかと思われますが、それを繰り返した「しりしり（い）」が食べ物を、単に「しり（い）」の方は道具を表わすという使い分けがあるのでしょうか。

国立国語研究所では『全国方言談話データベース 日本ふるさとことば集成』という音声と文字からなる方言資料を刊行しています。「第20巻 鹿児島・沖縄」の調査担当で、琉球大学の狩俣繁久先生によると、道具を表わす言葉として「デークニシリー（大根おろし）」「ソーガシリー（生姜おろし）」「ンムクジシリー（芋葛おろし）」などがある。一方「デークニシリシリー」「ソーガシリシリー」は本来「おろしたもの」を表わす言葉だが、現在では道具を表わすこともある、とのこと。さらに、道具を単に「シリシリー」と呼ぶこともあるし、新しい言い方では、千六本を作ることを「シリシリーする」ともいい、おそらく「にんじんシリシリー」も戦後広まった単語ではないか、とのこと。

かつて調査・採集した方言の記録（『沖縄語辞典』）によって、現在実際に使われている方言の姿や、そこにいたるまでの派生や変化などの動きを、より鮮明にすることができそうです。

（山田 貞雄）

参考：「琉球語音声データベース」

（<http://ryukyu-lang.lib.u-ryukyu.ac.jp/index.html>）

表紙のことば

第1回国際シンポジウムは「世界の国語研究所」をテーマに1994年（平成6年）1月に、2日に渡り国語研究所の講堂・会議室（旧西が丘庁舎）で開催され、世界7か国の研究者が集まりました。当時の庁舎には同時通訳の設備がなく、会場に通訳者ブースを設置して行いました。仮設のブースからは、受信機を通さなくても、音声ももれてくるといったこともありました。熱気にあふれた活発な意見が交換されました。

世界28の国・地域で「日本語観国際センサス」という調査を行ったのもこの頃です。また平成9年に創刊された『日本語科学』の「世界の言語研究所」では国内外の言語研究所が紹介されていて、23号まで掲載されました。

（普及広報担当グループ）



仮設の通訳者ブースと受信機

第34回「ことば」フォーラム「敬語と方言 ― ふるさとのことば ―」

後援：岡崎市・岡崎市教育委員会・NHK名古屋放送局・中日新聞社・東海愛知新聞社

国立国語研究所は、愛知県岡崎市で昭和28年と47年に「ことばの調査」を実施しました。その3回目の調査を今年の11月に予定しています。この調査に先立ち、名古屋方言の「ミエル」や「ゴザル」など主に敬語と方言の関係について皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

日時：2008年10月17日（金）

午後2時～4時（受付は1時30分から）

会場：岡崎市民会館・集会室1号室

（愛知県岡崎市六供町字出崎15番地1）

【講演】

杉戸清樹（国立国語研究所長）

【パネリスト】

梅津正樹氏（NHKアナウンサー）

阿南 愛氏（ヤフー株式会社・

「方言地図」企画担当、岡崎市出身）

井上文子（国立国語研究所・方言研究者）

入場無料・100名（事前申し込み制）

*参加お申し込みは「ことば」フォーラム担当

（電話 042-540-4300、FAX 042-540-4450）までお願いします。



- ・バス：名鉄バス停「籠田公園前」より北へ徒歩5分
名鉄バス停「本町」より徒歩5分
- ・徒歩：名鉄東岡崎駅より北へ約15分

平成20年度国立国語研究所公開研究発表会「言語生活の研究法：方言と文字」

日時：2008年12月19日（金）午後1時30分～4時（受付は1時から）

会場：国立国語研究所・講堂（東京都立川市緑町10-2）

【研究発表1】「文字の研究法―漢字字体研究の対象と方法―」 高田 智和（研究開発部門・研究員）

【研究発表2】「方言の研究法―体系と多様性をめぐって―」 三井はるみ（研究開発部門・主任研究員）

*詳細は後日ホームページで御案内します。

新刊

『日本語科学』第24号

2008年10月／国書刊行会／B5判横組み158ページ／税込3,150円

※『日本語科学』休刊に関する重要なお知らせ

『日本語科学』は、第25号の刊行(平成21年4月刊行予定)後、しばらくの間休刊します。また、投稿論文の募集につきましても、平成20年11月1日以降しばらくの間休止いたします。詳細につきましては、国立国語研究所のホームページを御覧いただけますようお願いいたします。

